

人と自然の共生

小川領一（鹿児島大学法文学部博士後期課程）

「いいところに行くねえ。」私がフィジーの調査に参加することを知った人は口をそろえてそういった。きっと「楽園」のイメージが定着しているからだろう。「楽園」ってどんなイメージだろうか。人によって違うだろうが、「ゆっくりした時の流れ」「常夏」「採れたてのフルーツ」「新鮮な魚介類」「温かい人たち」、このようなことはきっと共通していると思う。事実、私もそんなイメージを持っていた人間のひとりであり、「調査には寝袋をもって行ったほうがいいよ」という西村先生の少し気になるアドバイスに多少「？」を感じてはいたものの、そんな「楽園」に想像を膨らませ、フィジーへと向かった。

出発は8月7日。仕事の関係で先生とは4日ほど遅れて出発した。福岡空港はうだるような暑さだった。短パンにTシャツといういでたちで飛行機に乗り込んだ。フィジーのスバに着いたのはそれから36時間後。夜8時を過ぎていたが飛行機を降りると熱帯特有の湿気の高い空気がまとわりついたが、気温はそれほど高くないのか、福岡のような「うだるような」暑さではなかった。ホテルにチェックインしたあと、河合先生、西村先生と街中へ繰り出し、遅めの夕食をとった。首都スバの街は「楽園」の雰囲気からは程遠い。人口は約16万7千人¹。決して大都会ではないが、バスや車が走り回り、大通りにはレストラン、バー、クラブ、裏通りには娯婦らしき女性の姿やホームレスといった都会には欠かせない「要素」があちらこちらに見受けられた。その中を潜り抜けるように一軒の中華料理屋に入った。そこで水餃子をつまみながら、明日から南太平洋大学で打ち合わせがあること、3日後、現地調査予定の村「ナイカワンガ」という村に挨拶に行き、住民と調整をしてから本格的に現地入りをする事等、今後のスケジュールを話し合った。出発前のミーティングで河合先生の話や写真を見て、なんとなくナイカワンガのイメージは持っていたが、電気、水道もなく、携帯電話の圏外であるところで一週間とはいえ、現地で生活するには多少の勇気がいった。おまけに「ヤンゴナ」という「奇妙」な飲み物で毎晩宴会をするらしい。好奇心と不安が交錯し、それが妙な興奮になった。3日後からどのような事が始まるのか……。

村に挨拶に行く日だった。「ナイカワンガ」はスバから車で2時間とかからない。当日は午後2時ごろにつくようにお昼前にスバの街を出た。途中、大学で案内役のカウンターパートをピックアップし、村へと向かった。そのカウンターパートが「例のものはいつものところで買しましょう」とある小さな店の前に車を止めた。その店には木の枝を束にしたものがいくつも並んでいる。その中から一束選びトランクに入れた。これが「ヤンゴナ」だった。この枝でどうやって宴会するのか見当もつかない。店を出たのが午後2時を過ぎ

¹ 1996年 出展：フィジー諸島共和国統計局 <http://www.statsfiji.gov.fj/>

ていた。ここからまだ1時間以上はかかるという。予定の時間につきそうにないので、気になって河合先生に尋ねてみた。

「遅れそうだけど、大丈夫ですかね」

すると、思いがけない返事が返ってきた。

「大丈夫だよ。村の人たちには8月の上旬に行くって伝えているだけだから。」

私は思わず笑ってしまった。

国道からナイカワンガへと向かう道に入っていった。程なくすると人が歩いている。我々を見つめるなり、大きく手を振ってくれた。それから10分ほどすると村に入口に到着した。すぐに車の周りは人だかりになった。リックサックを持って車から降りようとする、少年がリックサックに手をかけた。日ごろの習慣から反射的に力が入った、が、彼の顔を見るとその力が抜けた。そして彼の先導で丘の上にある小さな家に向かった。途中、軒先から次々と人が身を乗り出し、笑顔で手を振ってくれる。丘の上の家ではひとりの老人が出迎えてくれた。彼はこの村の「酋長」である。フィジーでは「ラトゥ」と呼ぶ。我々日本人3人とカウンターパートがラトゥを前に座った。カウンターパートはおもむろに先ほど買ったヤングナを手に取り、口上を述べ始めた。儀式の始まりである。口上が終わるとラトゥは一度手をたたき、それを受け取り、口上を返した。最後に3度手をたたいて、村の若者にヤングナを渡した。しばらくすると「キーン」「ドン」と鐘のような音が繰り返し鳴り出した。その音が村中に響き渡っている。「何か」と聞くと、先ほどのヤングナをパウダー状にしているのだという。直径20センチくらいの鉄製の臼にヤングナをいれ、それを鉄製の杵で砕くのだ。そして1時間ぐらいすると先ほどのヤングナがきれいな粉になって戻ってきた。床の上にはブイを半分にした「桶」が置かれ、その中には水が入っていた。一人の若者がラトゥに対峙するように座った。彼は粉状のヤングナを布でくるみ、その水の中で丁寧に絞る。するとその水は白濁色になった。やしのカップでかき混ぜ、その濃さをチェックする。白濁した水が少し灰色になった頃、彼はラトゥに一杯差し出した。宴会の始まりである。やしでできたひとつのコップでみんな回しのみをする。「多めに入れて」「少なめにしてよ」といいながらヤングナを注ぐのは日本の酒の習慣と同じである。気がつくや周りには10人を超える男たちが宴席に加わっていた。このヤングナは酒と同様、感覚を麻痺させる飲み物である。ただ「酔う」というより「しびれる」といったほうが適切かもしれない。このヤングナを飲みながら、西村先生と私が村で1週間滞在すること、現地での農業生産を中心に生活状況を調査すること等々、3時間ぐらい話をし、この日はスバに戻った。

2日後、西村先生と私が村に入った。途中ヤングナを購入し、村に向かう。村に着くと少年が私のリックサックを持ち、ラトゥの家まで案内してくれた。前回とまったく同じである。今回違うのは、我々が帰らないということである。私は一抹の不安を感じていた。いつあの宴会は終わるのだろうか……。 「キーン」「ドン」という独特の音に誘われて村人たちが集まってくる。あの音は「宴会が始まるよ」という合図もかねているのだろう。我々

が村に入ったのは午後 3 時過ぎ。日が落ち、あたりが暗くなると、ベンジンのランプが宴席の中央に置かれた。時間がたてばたつほど人が増えてくる。何杯飲んだか分からないが、腹の中が水分でタプタプである。7 時を過ぎたあたりだろうか。女性が数人入ってきた。漸く夕食だった。メニューはタロイモ、キャッサバを蒸したものとやしの葉っぱのスープに焼きそばだった。焼きそばなんていうのはきっと現地の人が普段食べるものではないのだろう。きっと「東洋系」の客人に対する最大限のもてなしだったに違いない。ところが、宴席でこれを食べるのは我々だけである。部屋の隅に布が引かれ、その上にきれいに料理が並べられた。「さあ、どうぞ」というが、みんなの視線が気になってなかなか食べられない。「これがフィジアンスタイルだ」といわれ、妙に納得して我々は食べ始めた。イモ類は腹にずしっと来る。ものめずらしさに私はふたつほど続けて食べたが、それで十分だった。スープはココナッツ味でも柑橘系が利いているのか、意外とあっさりしている。焼きそばはインスタント麺をどこかで購入してきたのだろう。それをトマトやたまねぎと一緒にいためたものだった。食べたあとは「横になれ」といわれる。横では男たちが宴会を続けているのだ。しかし言われるがまま、横になった。横になることが消化にいいことなのかどうかは分からないのだが、少なくとも私は小さい頃から「牛になる」と言われた記憶がなく、何か悪いことをしているような気がしていた。しばらくすると、「またどうか」とヤンゴナを薦められる。宴会はまったく終わる気配がない。とにかく付き合おう。気合を入れて参戦するが、胃がヤンゴナを受け付けなくなってきた。それに女性が気づいたのか、「そろそろ寝たらどう？」という言葉で開放された。その部屋の奥が我々の寝る場所だった。そこへ「おやすみなさい」と逃げるように入り込んだ。きっと今日は歓迎の意味で特別なんだろうな、と、寝袋の中で今日の出来事を振り返った。

ところがこの状況は決して特別なことではなかった。次の日も同様のことが繰り返される。一緒に生活を見ていると、実質働いているのは午前中だけである。農作業は午前中に行うようだが、主食のイモ類、特にキャッサバは植えると特に何も手を加えることなく成長する。村のあちらこちらに芋が植えられ、成長すれば収穫し、それがその日の食料になる。のどが渴けば、やしの木のジュースを飲む。我々が訪れたのは時期ではなかったが、あちらこちらにマンゴーが自生していて、収穫期には嫌というほど堪能できるだろう。またこのナイカワンガ村は海岸に接しているため、マングローブの中にもぐりこめば魚介類がすぐに手に入る。ここでは食べることにはほとんど苦勞せず、生活ができる環境が整っている。おまけに「しゃかりき」になって労働することなくその環境を手に入れられるのだ。だから一通り仕事が終わると、午後には自然と人が集まりだし、宴会が始まるのだ。こんな生活を体験し始めて 3 日目が過ぎた頃だろうか、西村先生が我々を世話してくれているラトゥウの息子のお嫁さんに「ここは楽園だね」と言った。きっと、日本人が一般的に抱いている「楽園」のイメージとぴったりだったのだろう。私は西村先生の言葉に妙に納得した。彼女はびっくりして「ここが楽園だって言っているよ」とうれしそうに村中にいまわっていた。

ところが現実問題として、村人たちは彼らの環境を「楽園」だと思っていない。村の中で一番の金持ちは、退役軍人の夫妻である。家にはバッテリーを持ち込み、テレビと冷蔵庫がある。また水洗トイレやソファがあり、ラトゥよりも大きな家に住んでいる。近くの町で砂糖や油、お菓子類を買い込み、村の住民に販売し、「商店」の役割も担っている。夫妻の腕には金色の腕時計が輝き、それがまた「現代人」としてのステータスになっている。そんな夫妻に憧れのまなざしを向ける住民は少なくない。

日本に帰ると、まるで「時間」に飼われているような感覚を覚えた。腕時計を持ち歩き、常に時間を気にしながら生活をしている。私の子供達には「早くしなさい!」「遅い!」というのが口癖になっている。「次回ここに来るのは8月の上旬ね」ということで十分事足りる時間的な「感覚」は人間にとってプラスなのだろうか、マイナスなのだろうか。退役軍人夫妻の腕に光る腕時計を見てそんなことを感じた。

彼らの将来を私がどうのこうの指図するつもりはまったくない。ただ、これらからこの村の将来を決めていく人たちに対し、決して我々の生活が「楽園」ではないことをひとつの情報として知っていてもいいと思う。それを踏まえたうえで、フィジアンオリジナルの「幸せ」を確立してもらいたいと感じた。村を出てスバで学生をしている若者と話をする機会があった。「村に戻ると落ち着く。スバよりもナイカワンガがいいよね」という彼女たちに私は少しほっとした。きっと彼女たちはナイカワンガにスバにはない村の良さを体得しているのだろう。彼らが村のリーダーとなって村を先導することができれば、フィジアンオリジナルの「幸せ」を確立するのも夢ではないのではなかろうか。